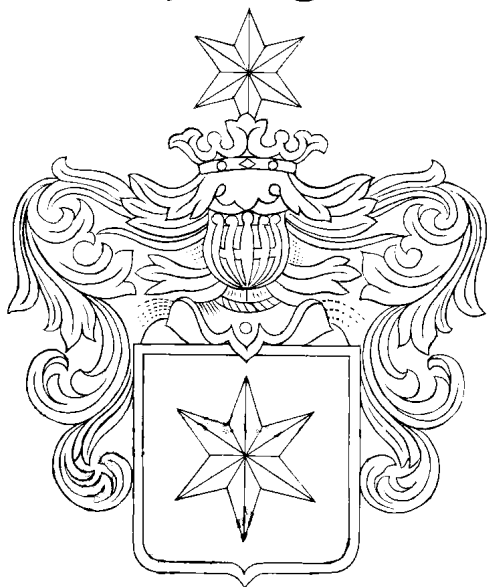


Goethes Werke



ゲーテ全集
1

潮出版社

Goethes Werke

ゲーテ全集 1

1979年6月10日 印刷 1979年6月25日 発行

訳者 山口四郎 田口義弘
松本道介 内藤道雄
今井寛 飛鷹節
高辻知義

発行者 富岡勇吉

発行所 株式会社 潮出版社
東京都千代田区飯田橋3-1-3 (〒102)
電話 販売部(03)230-0741
出版部(03)230-0781
振替 東京 5-61090

定価 3200円

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 牧製本印刷株式会社

© 1979, Printed in Japan

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。

目次

献げる言葉

小曲集

つどいの歌

物語詩

悲歌 その一

悲歌 その二

書簡

ヴェネツィアのエピグラム 一七九〇年

四季

ソネット

カンタータ

くさぐさの歌

ヴィルヘルム・マイスターより

人に宛てて

山口四郎訳 7

山口四郎訳 11

松本道介訳 61

山口四郎訳 80

今井寛訳 111

今井寛訳 129

今井寛訳 152

高辻知義訳 158

高辻知義訳 173

高辻知義訳 185

高辻知義訳 194

山口四郎訳 210

山口四郎訳 239

松本道介訳 243

芸 術

比喩的に

神と心情と世界

格言風に

エピグラム風に

抒情歌

つどい

神と世界

芸 術

エピグラム風に

比喩的に

穏和なクセーニエ

訳 注 386

解 説 454

総目次 470

松本道介 訳 249

松本道介 訳 265

田口義弘 訳 268

内藤道雄 訳 273

内藤道雄 訳 290

内藤道雄 訳 294

内藤道雄 訳 321

田口義弘 訳 323

飛鷹 節 訳 339

内藤道雄 訳 342

内藤道雄 訳 346

飛鷹 節 訳 352

ゲーテ全集

第一卷

装幀・中林洋子

詩
集

献ささげる言葉

朝は来た その歩みは

やさしくわたしを包んでいた微睡きせりを払い

わたしは目ざめて静かな家をあとに

心もすがすがしく山を登って行った

そして歩ごとに 咲きそめたばかりの

しとどに露を含んだ花を賞あづかめた

若い日は欣喜して昇り

ものすべて爽やかに わたしの心も爽やかだった

登るほどこに野辺の川面かわもからは

静かに霧が湧いて帯のようにたなびいた

それは霽はられるかと思えては形を変え わたしを巻き

わたしの顔面かほもてを包んで翼あるもののように立ち昇った

美しい眺めもはや楽しむによしなく

四辺はただ見渡しもきかぬ薄紗うすまゆにおおわれ

やがてわたしは雲に包まれたかのよう

その薄明に閉ざされてただひとり佇たなずんだ

と わかに陽ひのさす気配がして

霧の中に一条の輝きが見えた

くだる霧は音もなくたゆとうて沈み

昇る霧は森をまた山をめぐって散じた

射しそめる陽ひに先ず挨拶をと わたしの心は躍わだった！

霧きり霽はられて見る陽ひの美しさはまた一層ひとよと思つたのだ

だが空に演ぜられる戦いはいっかな果てず

一条の光耀こうように包まれ わたしは眼眩くらめいて佇んだ

やがて内なる心の促しにうながされ

大胆にわたしは眼をあげてみた

だが一切は燦然と燃える輝きのうちにあり

わたしはわずかに眼をしばたいたのみだった

そのとき雲に運ばれてひとり女神が

わたしの眼前まへに漂ただよってきた

かつて見たこともない美しい姿のその女神は

しばし足を停めて漂いつつわたしを見つめた

御身われを知るや？ そう語つた女神の口には

ありとある愛と誠実の響きが溢れていた

御身の受けし生の傷に 幾度か聖き香油を注ぎしはわれ

そのわれを識るや御身？ 必ずや御身は識らん

努めてやまぬ御身の心の 固くいやましに固く

永遠の絆に結ばれしこのわれを

既に少年の日に心よりの熱き涙もて

せつにわれにあくがれしは御身ならざりしや？

そうです！ わたしは至福にどっと地に伏して叫んだ

わたしはかねて久しくあなたを感じてきました

わたしの若い肢体に激情の小止みなく猛ったとき

あなたはわたしに安らぎを与え給うた

灼熱の陽にほてるわたしの額を宛然に天上の翼もて

やさしく冷やし給うたのもあなたでした

あなたはまた この世の至善の賜物をもわたしに賜うた

わたしはひとえにあなたによってのみ 一切の幸福を願

うものです

わたしはあなたの御名を呼びません わたしは多くの人

びとが

まことに屢々あなたの御名を口にするのを知っています

人は各自あなたを己がものといい その眼をあなたに向

けていると信じています

然し殆ど何びとの眼にも あなたの輝きは苦痛なのです

ああ わたしが道に迷っていたとき わたしには多くの

友があつた

だがあなたを知つたいま わたしはほとんど孤独です

わたしはあなたの恵みの光を人に隠し人に秘して

ただひとり みずからの幸福を味わわねばなりません

女神はほお笑み そしていった 見よ

御身らに多くを示さざりしは 真に賢き配慮なりしを！

御身は野方図もなき迷妄を離脱し

稚氣溢るる当初の恣意を支配し得しその日より

早くも己れこそは超人よと思ひあがり

成人たる者の義務を果すをなおざりにす！

御身と余人と相隔たることはたして幾許ぞ？

己れを知り 世と睦みて生きよ！

お許し下さい わたしは叫んだ 他意はなかつたのです

せつかくに開かれたこの眼を徒にすべきでしょうか？

わたしの血の中には喜ばしい意志が生きています

わたしはあなたの賜物の価値をこよなく知っています！
わたしの中に生い立った高貴な宝は人の為のものであり
わたしはそれをもはや隠しおおせず また隠そうとは思
いません！

もし同胞に示してはならぬものなら
何でわたしはこんなにも切なく道を求めたでしょう？

わたしがこう語ると気高い女神は

いたわりのこもった寛恕の眼でわたしを見つめた

わたしはその眼にみずからの過去を

かつての過ちと正しかった跡とを読むことができた

女神がほお笑んだとき 既にわたしは癒されていた

わたしの心は新しい喜びに膨れた

今やわたしは心からの信倚の念をこめて

女神に近づき 真近にその姿を仰ぐことができた

そのとき女神は辺りにたなびく

軽やかな雲と霞の帯に手を差しのべた

それは女神が掴むがままに捉えられ

引き寄せられたあとに既にはや霧の影はなかった

わたしは再び谷に眼を遊ばせることができ

振り仰いだ空は高くまた明るかった

ただ女神だけが清らかな薄紗を手にしていた

薄紗は女神を包んでなびき 数知れぬ髪をなして膨んだ

われは知る 御身をもまた御身の弱点をも

また御身の裡には 善なるものの生き輝けることをも！

こう語った女神の言葉は 永遠に耳朶を離れなかった

いざ受けよ かねて御身にと思ひ定めしものを

朝霞と明るき陽光もて織りなされたるこの贈り物

詩の薄紗を

真理の手より心静かに受くる者は幸福であり

その幸福者には一として満たされざるはない

日盛りに御身 また御身の友らむし暑く覚えなば

この薄紗をば空に投げよ！

涼しき夕風はたちまちに颯々とそよぎ

花々のかぐわしき匂い御身らを包まん

風のごと寄する地の思念の怯えは黙し

暗き暮簷は転じてやわらかき雲の褥となり

生の波はことごとく押し静められ

昼はやさしく好もしく 夜は明るく輝かん

さらば来たれ 友らよ 御身らの道に

生の重荷のいよいよに重きときも

また新しく甦よみがえりし祝福の 御身らの道を

花もて飾り黄金にがねなす果実もて飾るときも

いざわれらともに進まん 明日あすの日に向かいて！

かくてぞわれらの生 われらの行路ゆきぢには幸福きち多からん

孫子まごらがいつの日かわれらの死を悼いたまん日にも

かくてぞわれらが愛は存たもたえ その喜びとなるべきを

小曲集

若き日の心の小琴 年を経て鳴りいずれば
喜びもはた悲しみも歌となる

好意ある人びとに

欠陥はあってもそれは恥としますまい
それよりは早くこのささやかな集を完成させましょう
世界は矛盾に満ちたものであってみれば
この集に矛盾があってもそれは許されることでしょう

序にかえて訴える

情に激してどもりどもり口にしたことも
文字となつてみれば如何にも不思議なものに映ります
わたしはいま家々を戸ごとに訪れて
散り散りになつたその一枚一枚を集めることにしました

互いにながく遠い歳月をへだてた
生涯のさまざまなことどもが
いま一卷の本として綴られて
心ある読者の手にわたるわけです

詩人は沈黙を好みません
自己を人に告げようとしています
褒貶はもとより期するところでは
散文では告白をためらう人も
詩神の静かな神苑の薔薇の蔭では
しばしば心の中を打ちあけます

わたしの迷い わたしの努力 わたしの悩み
おしなべてわたしの生きてきたあと
それらはすべてこの花束のひとつひとつの花といえます
顔齡も青春も 欠点も美点も
こうして歌となつてみれば
なかなか棄てがたい趣があります

新しいアマジス*

まだ子どもだったころ

わたしは閉ざされた世界にいた

そうして何年ものあいだ

母の胎内に宿る子のように

自分ひとりを相手にすごした

だがその退屈をまぎらせてくれたのは

黄金の空想よ お前だった

たとえ王子ビビのよう*に

わたしは勇みたつ勇士になり

世界をあまねく遍歴した

そうして水晶の城をいくたびか築き

それをまた打ち壊し

きらめく槍を放って

龍のどてっ腹に突きたてた

ほんとうに わたしは男の中の男だった！

それからあつばれな騎士として

王女フィッシュ*を救いだした

姫はいたく好意をよせ

わたしを饗宴*に招かれた

わたしはそれに慇懃*に答えた

姫のキスは天上の美果

葡萄の美酒さながらに燃えたつた

わたしは死ねばかりの恋をした！

太陽に映えた姫の姿は

七宝*さながらに輝いた

ああ あの姫をわたしから奪つたのは誰なのか？

足早に逃げ去る姫を

引きとめる魔法の糸はなかったのか？

教えてくれ 姫の国はどこなのだ？

その国へ行く道はどこにある？

狐は死ねば皮を残す

昼めしのあと若いぼくらは

涼しい樹蔭に腰をおろした
恋の童神が来てみんなでいっしょに
《狐は死ねば》をやるうといつた

仲間はみんな大はしやぎ

好きな娘のそばにすわった

恋の童神が松明を消すといつた

さあこいつがロウソク代りだ！

赤くくすぶるその松明を

みんなでいそいで手渡してゆく

受けたとたんに誰もかれもが

すぐつぎの人の手に押しつける

ぼくにくれたはドリリスだつた

笑いざざめき手渡す彼女に

こつちの指がさわつたとたんだ

火はめらめらと燃えたつた

火はぼくの眼をやき顔をやき

炎々と胸に燃えうつり

焰はいまにもぼくの頭を
呑まんばかりに燃えさかつた

消そうとやつきに叩いて回るが

火勢はいつかな衰えもせぬ

狐のやつめ死ぬるところか

ぼくのところで生きかえつた

野ばら

童は見たり ひとつと咲ける

野なかのばら

咲き初めし朝の匂い

駆け寄りてしみじみ愛ずる

歎びのばら

ばら ばら 紅ばら

野なかのばら

童はいいぬ われは手折らん

野なかのばら

ばらはいいいぬ 手折らば刺さん

末遠き忘れがたみに
徒に折られじ

ばら ばら 紅ばら

野なかのばら

堪え性なき童は折りぬ

野なかのばら

抗いつ類に刺しつ

歎けども せんかたなくて

折られてはてし

ばら ばら 紅ばら

野なかのばら

眼隠しの鬼ごっこ

おお 愛らしいテレーゼよ!

お前の眼は眼隠しをとると

たちまち怖い眼になるんだね!

眼隠ししていた鬼のときは

すぐさまぼくを追いかけて

ずばりぼくを掴まえたくせに?

お前はみごとにぼくを掴まえ

しつかり抑えて放さないもんで

ぼくはお前の膝に倒れた

代わってこつちが鬼になったら

とたんに興ざめもいところ

めくらのぼくにつれなくあたって

鬼はよたよた手探りあるき

あふないところで手足を捻挫

さんざみんなもの笑い

お前が愛してくれないのなら

ぼくは眼隠しされたも同然

どこまで行っても前途は闇だ

クリステル

何かというと重く鈍く気が鬱して

恐ろしく沈鬱になってしまふ!

でもクリステルの傍にさえいれば

すつかり気持が立ちなおる